



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 147号 2010.9.11 発行 社会政策研究所

保育所や幼稚園など就学前の子を取り巻く制度を根本から変える「子ども・子育て新システム」について、これは障害児のサービスを大きく変えることになるかもしれません。これと、映画「ベンダ・ピリリ！～もう一つのキンシャサの奇跡」の紹介記事をお届けします。【kobi】

【「保育」どこいく 制度改革を考える】 福岡市保育協会がシンポ

西日本新聞 2010年09月09日



「子ども・子育て新システム」をめぐって意見を交わすパネリストたち

保育所や幼稚園など就学前の子を取り巻く制度を根本から変える「子ども・子育て新システム」。政府は2013年度の

施行を目指しているが、不透明な部分も少なくない。待機児童など問題が山積する中、新制度をどう具体化するか。福岡市保育協会は3日、市内でシンポジウムを開催。伊藤周平・鹿児島大法科大学院教授（社会保障法）をコーディネーターに、泉健太・内閣府大臣政務官（少子化対策担当）、篠原敬一・福岡市保育協会理事（野方保育園園長）の2人がパネリストとして議論した。三つのポイントに分けて紹介する。

市町村の義務後退も 公的責任

現在は児童福祉法24条に、自治体の保育の実施義務が明記されている。認可保育所に保育を委託するケースが多いが、つまりサービスそのものを提供する「現物給付」だ。自治体には子どもを保育しなければならない公的責任があるともいえる。新制度では、利用者がサービスを利用した料金の一部を補助する「現金給付」になるとみられる。

伊藤教授は「新制度の議論を聞くと、園と利用者の直接契約になるが、それなら現金給付になるのは明らか。（障害があるなど）対応の難しい子の行き場がなくなる」と指摘。篠原理事も「新制度の要綱には市町村の責務として5項目あるが、よく読むと24条はなくなり『努力義務』になるようだ。市町村の義務が後退するのではないかと懸念を示した。

これに対し、泉政務官は「現金給付になるかどうかはまだ決まっていない。今の流れだと現金給付になるのだろうが、24条は大事な話なので議論が必要だ。ただ、私としては市町村の責務が後退するイメージはない。そうならないように法案だけでなく政省令もチェックしていく」と答えた。

受け入れ拒否の恐れ 応諾義務

児童福祉法は「やむを得ない事由があるとき」以外は受け入れる「応諾義務」を規定している。新制度で利用者と園の直接契約になると、応諾義務はどうなるのか。子どもはき

ちゃんと受け入れてもらえるのか。

泉政務官は「応諾義務はきちんと課していく。発達障害、アレルギー、親自体が困難な家庭の子などをたらい回しにしない前提で制度をつくる」。この説明を受けて伊藤教授は「市町村に実施義務がないと、応諾義務は絵に描いたもちだ。利用者と園という民間の直接契約に、行政が介入するには限界がある。介護保険も障害者自立支援法も直接契約になり、応諾義務が形がいかた」と公的責任の維持を求めた。

待機児童解消なるか

応益負担

新制度では、希望者は市町村から「認定証」をもらい、自力で園を探すことになる。伊藤教授は「気力、体力、経済力。保育所探しは今以上に大変になり、就活ならぬ“保活”が必要になる」と語った。

認定は就労時間に応じた「時間認定」になり、限度額を超えた分は自己負担になるとみられる。ただ、現在の応益負担から応益負担になる、との一部議論については、泉政務官が「応益負担については厚生労働省にストップをかけている」と発言。「なぜ保育制度を(応益負担となった)介護保険をベースにしなければならないのか、自分もまだ理解できていない」と慎重な姿勢を示した。

直接契約、利用者補助方式だと、園の運営が不安定になるとみられる。運営費の請求事務が増え、後払いとなるため資金繰りが厳しくなる。利用分に応じた運営費しか受け取れず、現在のように毎月ほぼ一定した運営費は見込めなくなる。

伊藤教授は「例えばインフルエンザで休園したら、その期間は収入がなくなる」と指摘。園側が正規職員を非正規職員に切り替えるなど、保育の質が低下する可能性に懸念を示した。

泉政務官は「人材が集まる仕組みにするのが大前提。しかし財政の問題があるので、何を優先するかだ。都市部は待機児童があふれ、多様なメニューを用意しないと吸収できない。首都圏と地方は別の議論が必要だ」と答えた。篠原理事が「首都圏だけ特区にしたら」と提案すると「これまでの議論の積み重ねもあるが、そうした要望を大きな声で出してほしい」と呼び掛けた。

× ×

最低基準外さない 泉健太政務官・基調講演要旨

意見交換に先立ち、泉健太・内閣府大臣政務官(少子化対策担当)が基調講演した。要旨は以下の通り。

「保育を産業として活性化させよう」「地方主権でやるんだ」と聞くと、みなさん不安になるかもしれない。しかしわれわれは、すべての子に良質な成育環境を保障するため、子ども主体の制度をつくるにはどんな改善が必要か、との観点で取り組んでいる。

新システムは規制緩和のためではない。現政権は、保育の問題を規制改革の流れで議論するのをやめている。今後は「幼保一体化」「こども指針」「制度全体の骨格づくり」の三つのワーキングチームを作り、議論していく。

保育所に通う子への支援は必要だが、幼稚園や認可外施設の子、待機児童、専業主婦家庭の子への支援は十分だろうか。親の就労形態が変わり、園を移らなければならない例もある。

「こども園」(幼保一体化の施設)は地域福祉を担う。応諾義務もきちんと園に課し、障害や家庭環境など「困難な子」をたらい回しにしない前提で進める。ナショナルミニマム(国一律の最低基準)を外すとは一度も言っていない。

新システムは決まっていない点が多い。現場の本音をぶつけてほしい。

× ×

ワードBOX = 子ども・子育て新システム

政府の少子化社会対策会議が6月に要綱を決定した新制度。「国から地方へ」「官から民

へ」の基本方針の下、市町村を保育制度の実施主体と位置付け、権限と責務を明確化。認可制から指定制に切り替え、株式会社やNPOの参入を促す。運営費の自由度を高め、配当や他事業に回せるようにするが、保育の質の低下も懸念される。来年の通常国会に関連法案を提出し、段階的に実施する方針。

ベンダ・ピリリ！ ~もう一つのキンシャサの奇跡(仏) 未来を開く魂のバンド

読売新聞 2010年9月10日



上映時間わずか1時間27分。が、そこに凝縮された力感あふれる映像と心に染み入る音楽に圧倒された。

世界ヘビー級タイトル戦でモハメッド・アリに劇的な勝利をもたらした「キンシャサの奇跡」。その「奇跡」と比肩し得るドキュメンタリー映画の傑作だ。

中部アフリカのコンゴ民主共和国(旧ザイール)。その首都キンシャサの路上生活者=写真=の中から「スタッフ・ベンダ・ピリリ」は生まれた。現地語で「内面を見よ」を意味する誇り高きバンドのメンバーは8人。うち5人は障害者で、手作りの車いすに座り、切ない歌声を聴かせる。

カメラが追うのはバンド結成の2004年から5年間。ブリキ缶を改造した1弦ギターを操る少年とリーダーとの交流が主軸となるが、耳に残るのは、彼らの生活に密着したラテンの香りのする音楽だ。戦争による混乱と貧困からの脱出、そしてポリオ(小児まひ)による障害の根絶を願う歌詞には、彼らの切実な思いが込められている。

何より素晴らしいのは、逆境を乗り越えて再生を目指す破格のパワーであり、未来を信じる底抜けの明るさだろう。どっこい生きている、といわんばかりのアフリカの土性骨はやがてアルバムの録音や欧州ツアーという「奇跡」を生む。

監督・撮影はルノー・バレとフローラン・ドラテュライ。バンドの記録者であり、育ての親でもある2人のフランス人の功績はともかく、成功した彼らは祖国を変える起爆剤となり得るかどうか。続編への期待が高まる。渋谷・シアター・イメージフォーラム。

(映画評論家・土屋好生)

「障害者でも精神は自由」 映画「ベンダ・ピリリ！ ~もう一つのキンシャサの奇跡」

産経新聞 2010.9.10



【シネクラブ】「ベンダ・ピリリ！ ~もう一つのキンシャサの奇跡」のルノー・バレ(右)とフローラン・ドラテュライの両監督(左) = 7月28日、東京・神宮前のパスイェイススタジオ(高橋天地撮影)

ルノー・バレ、フローラン・ドラテュライ両監督に聞く

アフリカのコンゴ(旧ザイール)の首都キンシャサには、「シェゲ」と呼ばれるストリートチルドレンが数万人単位であふれている。そんな街角でフランス人の映像監督2人は、独特のリズムを奏でる力強い音楽を耳にする。これが初の長編ドキュメンタリー映画「ベンダ・ピリリ！ ~もう一つのキンシャサの奇跡」を手がける出発点となった。

プロモーションで来日したフローラン・ドラテュライ(39)とルノー・バレ(40)の両監督は「こんなにも苦しんでいる人たちがいると、涙を誘う映画にはしたくなかった」と口をそろえる。

演奏していたのは、路上生活者の間では名物バンドの「スタッフ・ベンダ・ビリリ」。幼児期にポリオを発症して障害を抱え、車いすや松葉づえ生活を余儀なくされている5人を含む路上生活者8人で構成されている。

■世界デビューめざす音楽への熱い思い

本作では、苦しい現実にもがきながらもレコーディングを実現し、世界デビューの夢をかなえようと奮闘するメンバーたちの姿を記録した。

メンバーは明るく、苦しい境遇を冗談にして笑い飛ばしてしまうほど。「夢はいつかかなう」「人生に遅すぎることはない」という前向きな気持ちは、信仰にも似た強さで持ち続けていたという。

メンバーが目指す音楽は、バンド名のベンダ・ビリリという哲学的な言葉に集約される。現地で話されるリンガラ語で「外見をはぎとれ」という意味で、つまりは「内面を見よ」。

ドラテュライ監督は「車いす姿というルックスに加え、路上生活を強いられていることが一見、不自由に見えても、精神は最大限に自由なんだ。彼らは歌詞を通じて訴えかけてくる」と説明する。

当のメンバーは映画化の話を持ちかけられたとき、どんな気持ちだったのだろう。「彼らは映像を撮られることに抵抗はなかった。レコーディングの実現こそが世界デビューという夢への第一歩であり、映画もその延長線上にある手段と考えたようです」とバレ監督。

2009年3月に初CD「屈強のコンゴ」がリリースされると、メンバーの人生は変わった。世界のマスコミを驚かせ、その年に欧州ツアーも実現。今年のカヌ国際映画祭では監督週間オープニング作品にも選ばれた。

ドラテュライ監督はボソリとつぶやいた。「障害を抱えているとか、いないとか、そんな区別は意味がないんだと気づかされたよ」

東京・渋谷シアターイメージフォーラムで9月11日、大阪・梅田ガーデンシネマなどで10月、ほか順次公開。

(文・写真：高橋天地(たかくに))

■Renaud Barret 1970年4月2日、パリ生まれ。広告グラフィック会社を営んでいた2003年に初めてコンゴへ。アフリカ文化の力強さにひかれ、友人のドラテュライ監督と04年に再訪。

■Florent de La Tullaye 1971年7月31日、仏グルノーブル生まれ。写真家として世界各地を転々とする。バレ監督と訪れたコンゴでは、本作のほか2本のドキュメンタリーを製作。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行